

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00221

研究課題名(和文) 現代日本人作曲家の伝統音楽受容による音楽語法研究

研究課題名(英文) Musical language research through the reception of traditional music by contemporary Japanese composers.

研究代表者

河添 達也 (KAWASOI, Tatsuya)

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：20273914

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本を代表する存命中の作曲家、湯浅譲二と細川俊夫の、日本伝統音楽受容の様相を、彼らの作曲作品を通して明らかにしようと試みた。コロナ禍のため、一部研究目的や内容を変更したが、湯浅作品では「おやすみなさい」(島根大学の編曲委嘱による管弦楽伴奏版)、細川作品では「さくら」および「人よ、汝の罪の大きさを嘆け」を中心に、音楽語法の特徴の一端を明らかにした。比較対象者のM. ジャレル、I. フェデレの作品についても一部言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

存命中の日本人現代作曲家に関する作品研究、中でも、楽曲分析的研究はほとんど行われておらず、わずかながらでも、その先行的な学術提案を行うことができたこと。また、作曲者本人へのインタビューを通して、その作曲統合過程の実際を記録にとどめるとともに、創作に至った企図などの楽曲背景についても明らかにできたこと。さらに、普段日本人作曲家の最新作を聴取することの少ない地方都市において、これらへの接触機会の増大というインパクトを残すこともできたこと。

研究成果の概要(英文)：I have attempted to clarify the aspects of the reception of traditional Japanese music by Joji Yuasa and Toshio Hosokawa, two living composers who represent contemporary Japan, through their compositions. Although the purpose and content of the study were partially changed due to the Corona disaster, I clarified some of the characteristics of their musical narrativity, focusing on "Goodnight, Sleep Well" an orchestral accompaniment version commissioned by Shimane University, in Yuasa's work, and "Sakura" and "O Mensch, Bewein' dein' Suende Gross" in Hosokawa's work. Some works by comparators M. Jarrell and I. Fedele were also mentioned.

研究分野：作曲

キーワード：日本人現代作曲家 楽曲分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 膨大な数の作曲作品が世界中の演奏会や音楽祭で創出され、作品の個別性が高まるにつれて、作曲家の国籍や生まれ育った環境を、作品の特徴と関連づける視線は薄まりつつある。これまで、多くの芸術作品が内包してきた地域の独自性や伝統との関わり、あるいは現代社会に対するメッセージ性などの脆弱化が進む中で、このような現状に疑問を投げかける音響作品を生み続けている作曲家も存在する。たとえば、現代日本を代表する作曲家である湯浅譲二(1929-)や細川俊夫(1955-)は、自著やプログラムノートのなかで、作曲することの意義を、松尾芭蕉の俳句や禅僧の書・水墨画と関連付け、「かつて日本人が有していたであろう繊細で豊かな感受性を取り戻すための問題提起」だと規定し、その作品は「現代を生きる作曲者のコスモロジーの反映」だと述べている。伝統との関わりに注視しつつ、人々の感受性錬磨への寄与に目途を置き、創作行為の原点に立ち返ろうとする姿勢である。

しかし、このような伝統音楽受容について、作曲理論に基づく楽曲分析的な「作品研究」としてその根拠が言明されている例は、わが国では殆ど見受けられない。湯浅作品に関するオーケストレーション(管弦楽法)研究は未着手(湯浅氏へのインタビュー2017)であり、細川作品に関する近著「細川俊夫音楽を語る」(W=W・シュペラー/柿木伸之訳)も、おもに作品への思想的言及がインタビュー形式で綴られる内容となっている。このように、20余年前に他界した武満徹以外の、日本人作曲家に関する作曲技法分析による作品研究は、世界的に見ても殆ど未着手の現状であるといえる。

(2) また、これまでの作曲作品研究は、主に音楽学の学術領域における分類学的、資料・史料学的考察を主軸に据えていたことから、存命中の作曲家をその研究対象とすることへの躊躇があったことは否めない。作曲者の意図を精緻に反映する一次資料を得るには、同時代に活動する作曲家による、統合的な作曲技法的研究が必要なのではないか。

2. 研究の目的

そこで、現代日本を代表する存命中の作曲家 湯浅譲二と細川俊夫の作品および音楽思考の研究を通して、彼らの日本伝統音楽受容の実態を明らかにし、日本人作曲家作品における伝統音楽受容の独創性を探ろうとする試みが、本研究の全体構想である。

創作の背景にある詩的な解釈ではなく、作品そのもののオーケストレーション(管弦楽法)を作曲技法の観点から分析することに主軸を置き、伝統音楽受容による音響化の具体的事象を明らかにする。

また、楽譜上の分析研究に留まらず、作曲者本人の協力を得て、作曲時の統合過程における言質記録も試みる。このことによって、今後の作曲家研究に向けた第一次資料の創出にも寄与できると想定しており、存命中の作曲家を研究対象とする理由もそこにある。

3. 研究の方法

(1) 湯浅・細川両氏の新旧作品群のオーケストレーションに着眼することで、作品の「時間」「空間」「音色」「構成」などの楽曲構成要素が、どのような日本伝統音楽の独創的思考や奏法から影響を受けているのか、分析的手法を用いて具体的に明らかにする。また作曲者本人へのインタビューも行って、筆者の分析結果への確認や補足情報の収集も行う。

なお、当初は、ライブ演奏の聴取による情報収集や、同時代の西洋人作曲家作品との比較分析も行う予定であったが、研究期間の大半がコロナ禍と重なったため、主に湯浅・細川作品の楽譜上の分析研究やメールインタビューへと主眼を移行し、研究を遂行した。

(2) オーケストレーション(管弦楽法)の研究を行うにあたっては、楽譜上の研究に加えて、実演を伴う音響聴取が不可欠である。また、両氏作品の一般社会における積極的な接触機会の創出を図るとともに、教員養成系カリキュラムにおいても両者の作品を取り入れて合奏指導法研究を行い、学校音楽教育へのレパトリー拡充にも努める。

4. 研究成果

当初は、研究対象とする管弦楽作品又は作曲作品のライブ演奏を可能な限り聴取し、作曲者への対面インタビューも行って、その後の管弦楽法に関する楽譜研究への分析視点を確立することを目指していた。しかしながら、「3. 研究の方法」欄でも述べた通り、初年度末からコロナ禍となり、その後1年間のライブ上演が殆ど中止されたことや、複数年にわたって県外移動や海外渡航の自粛を求められたため、当初予定していた西洋人作曲家との比較研究や、十全な

対面インタビューを行うことが不可能となり、研究の主眼を楽譜研究へと切り替えた。

以下は、コロナ禍以前のライブ演奏聴取の実績や、作曲者へのメールインタビュー、コロナ5類移行後の限られた期間内における対面インタビュー、また筆者が指揮を受け持った実演を伴う音響聴取などの実績に基づく研究成果である。それぞれの事項に分類して記述したのち、全体を概観したまとめを記す。

(1) 湯浅譲二作品について

湯浅作品のライブ演奏聴取は、コロナ禍直前の日本フィルハーモニー交響楽団第711回東京定期演奏会における「シベリウス讃 - ミッドナイト・サン -」である。演奏会終了後の作曲者へのインタビューから、曲は大きく2つの部分から成り、世阿弥の著書にある能の思想から着想を得たことなどが確認できた。

楽譜上の楽曲分析研究では、「室内オーケストラのためのプロジェクション」(2008/2010)と、「メゾ・ソプラノと管弦楽のための“おやすみなさい”」(2013/2017)を取り上げた。

湯浅は、前衛作品を作曲するとき、大きく2つの姿勢を明確にしている。1つは、何らかの物語性を持ち、具体的な事象を音で表現しようとする作品群。もう1つは、そのような言語的に説明できる物語性を持たない《音響態そのものの推移によって生み出される》抽象的な作品群である。後者を湯浅は、J.P.サルトルの提唱した《意識を時間化し、未来に投企する》という概念と重ねて「プロジェクション」と名付け、一連のシリーズを生み出している。「室内オーケストラのためのプロジェクション」は、その第16作である。一方「おやすみなさい」は、福島出身の詩人、長田弘が震災後に書き下ろした詩に、郡山出身の湯浅が曲をつけたもので、詩の内容に沿った物語性のある作品である。オリジナルはメゾ・ソプラノとピアノのためのデュオ作品で、翌年には合唱用にも編曲されているが、筆者が分析を行ったのは、島根大学の委嘱による管弦楽伴奏版である。前者「室内オーケストラのためのプロジェクション」では、冒頭休符の扱いにおける日本伝統音楽の間(ま)との関連性や、オーケストレーション上の重層感、あるいは旋律線のフィギュアに注目して合奏指導法的視点から論じた。また後者「おやすみなさい」については、その管弦楽法の特徴を、歌詞の描写性の推移と関連づけて考察した。これらの成果については、論考「楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論」にまとめ、『島根大学教育臨床総合研究2021』において公表した。

実演を伴う音響聴取

前述の管弦楽伴奏版「おやすみなさい」を、第68回島根大学管弦楽団定期演奏会において、筆者の指揮のもと演奏した(Sop.狩野麻実)。初演から4年後の再演となるが、オーケストラ・パートの記譜についてミス等を修正し、確定版として提案した。この管弦楽伴奏版については未出版であり、作品情報は、日本現代音楽協会 web サイト内の作曲作品データベース「日本の作曲家とその作品」(日本現代音楽協会編)に公開されている。

(2) 細川俊夫作品について

細川作品のライブ演奏聴取は、「次世代の作曲家たち」における「旅 - フルートと室内オーケストラのための」(2001)(Fl.森川公美, 石川星太郎/広島交響楽団)、「武生国際音楽祭2019」での「3つのエッセイb」(世界初演, S.Sax.大石将紀)、「小さなエッセイ」(日本初演, Cb.エディクソン・ルイース)、「2台のマリンバのための“想起”」(2002/2024, Marimb.イサオ・ナカムラ+ノリコ・ツカゴシ)である。

「旅」は、細川の、他の協奏曲同様に、独奏を「人」、オーケストラが「人の内と外に広がる自然」と捉え、フルートの問いかけが水紋のようにオーケストラに共鳴し、互いの往還を繰り返しながら一体化する作品であり、後に記述するM.ジャレルのヴァイオリン協奏曲とは対照的な音響構成となっている。「想起」は、マリンバ・ソロ曲として作曲された作品を、マリンバ2台用に細川自身が編曲したもので、コロナ禍後のナカムラ+ツカゴシ・マリンバデュオリサイタルで世界初演された。この曲は、2台のマリンバが微妙なズレを伴いながら、霧のなかから微かに旋律線の輪郭が現れては消えていく、極めて慎重で微細な楽器法でリ・コンポーズされており、水墨画のような淡い濃淡と、雅楽における深く長い息遣いが感じられた。なお、同演奏会では、筆者の「Duo - マリンバ・ソロのための」も演奏された。

楽譜上の楽曲分析としては、武生国際音楽祭で聴取した「小さなエッセイ」に取り組んだ。この作品は未出版だが、作曲者本人からオリジナルスコアのコピーを譲り受けた。コントラバスのソロ作品で、細川本人によると、近い将来作曲予定のコントラバス協奏曲のインスピレーションを得るために書いたとのこと。曲は、5つの部分から成り、それぞれの場面が音高としての繋がりをもちながらも、全曲を支える土台となる響きが波打つように変化していて、第4・

5 部では激しく揺れる嵐の様子が描かれている。時間は水平に流れているが、基盤となる響きがエコーの残像のように響いていて、能の音響空間のように、曲が進むにつれて、新たに奏される音が沈潜、もしくは重層的に重なっていく。やや詩的な表現になるが、例えると記憶の「美しい澱」のようなものが、深く降り積もっていくような印象を受ける。

実演を伴う音響聴取および楽曲分析

筆者が指揮する「島根大学管弦楽団」の定期演奏会において、「人よ、汝の罪の大きさを嘆け」（2022年）、および「さくら」（2022年・2023年の2年連続）を取り上げた。

「人よ、汝の罪の大きさを嘆け」は、J.S.バッハが作曲した同名のコラール（BWV622）を、細川が2009年に弦楽四重奏用に編曲した作品である。実演時は、これを弦楽合奏の編成で演奏した。楽曲分析のポイントは、主に以下の3点である。1点目は、前奏（Vorspiel）の6小節間をすべてフラジオレット奏法としている点。2点目は、練習番号3（13 - 16小節）の主旋律が、ヴァイオリンよりも高い音域でヴィオラに割り当てられていること。3点目は、練習番号4（17 - 20小節）の全楽器に、スル・ポンチチェロという特殊奏法が指定されていること。これらの箇所について、その音響的特徴であるオーケストレーションの視点と、オリジナル・コラールの歌詞との関係からその意図を読み取り、仮説を立てながら、これに見合う奏法を練り上げていった。また、細川が、数あるバッハのオルガン作品の中から、なぜこの曲を選んで編曲したのか、細川本人へメールインタビューを行った。それによると、筆者が細川と共に主催していた「秋吉台国際20世紀音楽セミナー&フェスティバル」の第4回開催時（1992年3月）に招聘した哲学者の中村雄二郎氏が、その講演のなかで森有正が愛好したオルガン作品として、森自身の演奏音源を流したことがその嚆矢となった、とのことであった。この作品に関する、より詳細な分析については、論考「楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論」にまとめ、『島根大学教育臨床総合研究2022』において公表した。

「さくら」は、日本古謡の同名曲を、ドイツのバンベルク交響楽団の委嘱によって、細川が編曲した作品である。また、この作品の編曲意図については、コロナ禍後に、対面で細川本人へのインタビュー調査を行うことができた。a-mollを選んだのは、人間の声に近い調として好んでいること、木管楽器の下降スケールやトリプルタンギングの音型が「さくら」の花びらが舞い散る描写であること、人間の恣意性を排した自然の音として風鈴を用いたことなど、興味深い一次資料を得ることができたが、現在、これらの言質を論考にまとめているところであり、今後より詳細な分析による論考公表を予定している。

2022年に筆者の指揮でこの作品を演奏した際のプログラムノートには、一例として以下のような個人的な感受を記していた。「弦楽器の特殊奏法と管楽器の息音によって、母胎から生命が誕生する瞬間を描写するような冒頭に始まり、徐々に“さくら”の旋律が浮き上がっては消え、期待と不安が交錯するように反芻し、強く叫ぶような音響で根源的な生命力と自然の厳しさが謳われる。その後、フルートのソロによって、自然に対峙する人間の孤高な精神が静かに奏でられ、再び母胎に回帰して行くかのような、深い静けさの中に旋律が溶け込んで行く。このような“さくら”のあたらしい世界観をどこまで音響化できるか、島根大学の若い音楽学生と共に挑戦してみたいと思っている。」

なお、細川は、管弦版のみならず、同様のコンセプトで合唱用にも「さくら」の編曲を行っており（未出版）、その演奏音源の提供も受けている。併せて今後、分析を試みる。

（3）マイク・ジャレルの作品について

フランス系スイス人作曲家で、ヨーロッパのシステムティックな作曲技法の正統的な継承者といえるジャレル。彼の作品のライブ演奏聴取は、コロナ禍前の「サントリー・サマーフェスティバル2019」のテーマ作曲家として作曲者本人が招聘来日し、演奏された数曲の内、ヴァイオリン協奏曲「4つの印象」（世界初演）、およびオーケストラ作品「...今までこの上なく晴れわたっていた空が突然恐ろしい嵐となり...」（2009・日本初演）の2曲である。ヴァイオリン独奏はルノー・カプソン、2曲ともパスカル・ロフェ指揮、東京交響楽団の演奏であった。これら2曲の演奏会では、作曲者の許諾を得てリハーサル時から参画することができ、世界初演作である「4つの印象」のスコアも手にすることができた。4楽章から成る、このジャレルの協奏曲は、理知的な構成原理に基づいてシステムティックに創作されており、ほぼ1小節ごと拍子も変化する極めて複雑な生成構造を持つ。モチーフの輻射点も複層的であり、細川作品のように、独奏楽器とオーケストラとが1つの音響母胎の中で応答し合う構造とは、全く異なる音楽思考によって生成されている。

（4）イヴァン・フェデレの作品について

フェデレ作品のライブ演奏聴取は、コロナ禍前の「武生国際音楽祭 2019」に、彼が招聘作曲家として来日した際の特集コンサートにおける次の 3 作品である。「春俳句 - ソプラノ・チェロ・バスクラリネットとパーカッションのための」(日本初演)、「想像の島々 - フルート・バスクラリネットのための」(日本初演)、「群島メビウス - ヴァイオリン・チェロ・クラリネットとコントラバスのための」(日本初演)。中でも、「春俳句」は、英訳された 19 作の俳句をもとに作曲されたもので、比較分析の対象作品として期待できた。

(5) まとめ

本研究期間の大半がコロナ禍と重なったため、当初予定していたライブ演奏聴取のための、ほぼすべての演奏会が中止となり、楽曲分析のための情報収集や、作曲者本人への対面インタビュー、彼らの作曲統合過程への参画など、本研究遂行のための基軸となる活動の多くがキャンセルとなった。そのため、細川、湯浅両者の作曲作品における、日本伝統音楽受容の音楽語法を、西洋の同世代作曲家作品との精緻な比較分析によって明らかにすることはできなかった。

一方で、細川や湯浅の作曲楽曲を、1 作品につき半年以上の期間にわたって分析・実演する機会を設け、その特徴的なオーケストレーション(管弦楽法)や、日本伝統音楽の構造的特徴を援用した作曲語法を、実際に音を出しながら考察し、その成果を学术论文と一般聴衆への公開演奏という形で提案できたことで、本研究の目的の一端は達成できたのではないかと考えている。併せて、普段、日本人作曲家の最新作を聴取することの少ない地方都市において、これらへの接触機会の増大というインパクトを残すこともできた。さらに、メールインタビューによる、作曲者本人の作曲意図や創作背景の一部についても明らかにすることができ、今後の作曲家研究に向けての一次資料を得ることもできた。

また、当初、日本人作曲家の比較対象とした、M.ジャレルや I.フェデレの作品についても、世界初演や日本初演を含む複数の楽曲に関する一次資料を得ることができ、今後の作曲家研究や作品研究に向けた足がかりとすることはできたのではないかと考える。

コロナ禍を経て日常を取り戻しつつある現在、今回の研究概要を改めて省察し、ここで得たデータや研究成果を足掛かりとして、引き続き日本人現代作曲家における伝統音楽受容の実態を、作曲技法の各パラメータに分別しながら明らかにすることが、今後の関心事である。

<引用・参考文献>

- ・河添達也「楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論」『島根大学教育臨床総合研究 2021 Vol.20』P135-P147 (2021)(<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/53830>)
- ・河添達也「楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論」『島根大学教育臨床総合研究 2022 Vol.21』P171-P182 (2022)
- ・河添達也「“おやすみなさい” “さくら” 曲目解説」『第 68 回島根大学管弦楽団定期演奏会パンフレット』P4 (2022)
- ・日本現代音楽協会編「日本の作曲家とその作品」
<https://www.jscm-db.net/db/compositionDtl/?id=11633> (2024/06/13 最終確認)

<参照楽譜>

湯浅譲二「室内オーケストラのためのプロジェクト」Schott Music (レンタル)
湯浅譲二「おやすみなさい - メゾ・ソプラノとピアノのための」音楽之友社 526810
湯浅譲二「おやすみなさい - 混声合唱版」音楽之友社 545980
湯浅譲二「おやすみなさい - 管弦楽伴奏版」島根大学
細川俊夫「SAKURA - for orchestra」SCHOTT (レンタル)
細川俊夫「原像、開花、書ほか - 弦楽四重奏のための」SCHOTT SJ1174-04
細川俊夫「想起 - マリンバのための」SCHOTT SJ1160
細川俊夫「小さなエッセイ - コントラバス・ソロのための」(未出版)
Michael JARRELL「4 Eindrücke-concerto pour violon et orchestre」Lemoine 29 477H.L.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 河添達也	4. 巻 21
2. 論文標題 楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根大学教育臨床総合研究2022	6. 最初と最後の頁 171-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河添達也	4. 巻 20
2. 論文標題 楽曲分析の手法を用いた合奏指導法試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学教育臨床総合研究2021	6. 最初と最後の頁 135-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原田理紗子・河添達也	4. 巻 20
2. 論文標題 視覚と聴覚の関連性に着目した高等学校芸術科（音楽）における教材開発研究 - 視覚化教材の有用性について -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学教育臨床総合研究2021	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林 睦，時得 紀子，新井 恵美，中務 晴之，河添 達也，木下 大輔，齊藤 祐，高橋 雅子，杉江 光	4. 巻 38
2. 論文標題 教員養成大学・学部の地域貢献に関する研究：教大協全国音楽部門大学部会のアウトリーチ研究プロジェクトをもとに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 141-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河添達也
2. 発表標題 管弦楽法分析に基づく式実践
3. 学会等名 第68回島根大学管弦楽団定期演奏会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河添達也
2. 発表標題 管弦楽法分析に基づく式実践
3. 学会等名 第67回島根大学管弦楽団定期演奏会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河添達也
2. 発表標題 管弦楽法分析に基づく式実践
3. 学会等名 第66回島根大学管弦楽団定期演奏会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河添達也
2. 発表標題 「教員養成における作曲理論関連科目の授業改善」
3. 学会等名 第44回日本教育大学協会全国音楽部門大学部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河添達也
2. 発表標題 管弦楽法分析に基づく指揮実践
3. 学会等名 第65回島根大学管弦楽団定期演奏会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・「第67回島根大学管弦楽団定期演奏会」パンフレットにおける曲目解説 ・「第68回島根大学管弦楽団定期演奏会」パンフレットにおける曲目解説
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------